

氏名(本籍地)	井原 奉明(東京都)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第65号		
学位授与年月日	平成22年3月16日		
学位授与の要件	昭和女子大学学位規則第5条第2項該当		
論文題目	日本語における「もの」と「こと」の概念に関する研究		
論文審査委員	(主査)	昭和女子大学特任教授	池上 嘉彦
	(副査)	昭和女子大学特任教授	島田 太郎
		昭和女子大学教授	吉田 昌志
		帝京大学教授	坂梨 隆三

## 論文要旨

本論文は、古くから日本語の基礎語彙の一部として現在に至るまで存続してきている「もの」と「こと」という語の意味、用法を綿密に、かつ必要に応じて両語を比較対照しながら分析、検討し、その背後にあって日本語話者の認知的な事態把握 (construal) の仕方を特徴づけていると想定されるのは如何なるものであるかを明らかにすることを意図した試みである。

第一章では、第二章以降における具体的な議論への導入として、本研究の対象とするところを著者自身がどのようなものとして受けとめているか、そして、本論文ではどのように対象を規定し、どのような方法でそれにアプローチし、そこからどのような新しい知見の得られることが期待されるかが論じられる。

「もの」と「こと」は上代からその使用が認められる語であり、その用法は具体的、抽象的な対象を表わす実質名詞にとどまらず、形式名詞、終助詞にも広がっている。たとえば「もの」は、実質名詞としての、具体的な一つの個物、物体や物品という意味だけでなく、食べ物・衣類等の特殊の物体、抽象化・一般化された存在、霊や怨霊、神、そして人と、多岐にわたる意味を持つ。一方、「こと」も、実質名詞として具体的な事件、世に起る現象、出来事、重大事を意味するばかりか、抽象的な現象、ことがら、人の行為、動作、仕事、さらには理由にまで意味領域は広がっている。そして、それぞれが形式名詞や終助詞、接辞としての用法を発達させている。しかし、本論文はある時代を取り上げて両語の特定共時的な意味・用法を明らかにするものでもないし、通時的な意味変化を正確に跡付けることを目指すものでもない。本論文は、いわば共時・通時的視点を越えた観点から、「もの」と「こと」の意味・用法の中に変わらぬ部分があることを前提とし、それを捉えようとする。「もの」と「こと」の概念には上代から現代に至るまであまり変わらぬ部分があり、<執拗な接続低音 (basso ostinato)> (丸山眞男「歴史意識の「古層」」p.7) として両語の意味・用法に響き続けているはずで、両概念

は、そのようにして、主体が世界を把握する際の認知様式に、相互に関連づけられながら大きく関わっている。人は言語化の対象とする事態に対して、どの部分を言語化するかしないか、そしてそれらをどのような視点で捉えるかを主体的に決め、その把握の仕方に沿って言語操作を進めるが、「もの」と「こと」はそのような認知的な営みの中で、人間の認知様式に従う形で区別される概念であり、「もの」と「こと」をこのように認知的な枠組みの中で概念規定し、両者の関連性を明かにすることが本論文の第一の目的とされる。第二の目的は、「もの」と「こと」と〈私〉との関わりを明確にすることで、「もの」と「こと」は、認知様式に従った意味区別を持つだけでなく、〈私〉との関わりの中でも〈生動性〉、〈他者性〉、〈体験性〉といった意味特性との関係で対比を示すことが指摘される。第三の目的は、「もの」と「こと」の概念を明確にした後で、日本語話者が「こと」への志向性を見せることを示すことで、英語話者が「もの」的把握をする傾向にあるのに対し、日本語話者は「こと」的把握をする傾向があることが論じられる。

以下、第二章、第三章、第四章では、第一章の論述の趣旨に沿って、調査、説明、論証が進められる。

第二章においては、古語辞典、国語辞典、類義語辞典等を利用し、「もの」と「こと」が辞書によってどのように定義され、どのような意味的区別を立てられているのかが検討される。近現代の国語辞典として『大辞林』（第三版）、『新潮 現代国語辞典』（第二版）を主に参照しながら現代の意味と用法、古語辞典としては、『新潮 国語辞典 ー現代語・古語ー』（第二版）に依拠しつつ、『角川古語大辞典』、『岩波古語辞典』（補訂版）等を併用して古い時代の意味と用法の確認がなされる。また、それに加えて、基本語辞典・類義語辞典、その他の事典類を参照して、それぞれの意味および両概念間の差異を明確にする考察がなされる。

第三章においては、近現代以前と以後に分け、「もの」と「こと」に関する主要な先行研究を調べる。近現代以前については、一部の紹介にとどまるが、近現代以降からは、「もの」と「こと」を論じた十一名の代表的な論考を採り上げて、彼らによる「もの」と「こと」の概念およびその区別が検討される。本章で採り上げる論者および研究は、少なくとも独自の視点を含み、それ以降の研究に影響を与えていると判断されるものに限定している。大きく四つの時期に分け、最初の時期を1930年代頃までとし、まず城戸幡太郎の研究を紹介、次の時期は1930年代とし、和辻哲郎、出隆という両哲学者の考察がまとめられる。第三の時期は1970年代で、さらに二つに分けられ、一方では大野晋、大森荘蔵、廣松渉の研究、もう一方では木村敏の研究が取りあげられる。第四の時期は1980年代以降で、荒木博之、池上嘉彦、坂部恵、小林敏明という四名の論者の研究が論じられる。

第四章は、著者自身の考えが展開される本論文の中核的な部分である。まず、「もの」と「こと」がまず抽象的なスキーマの観点から対比され、「もの」は〈有界的〉（bounded:つまり、明確な輪郭を有し、周囲とは不連続な形で限定されていること）、「こと」は〈無界的〉（unbounded:つまり、明確な輪郭を有さず、周囲に溶け込む形で境界がはっきりしないこと）と、対立的に特徴づけられること、次に、「もの」と「こと」は、「もの」が〈部分〉、「こと」

が<全体>という形でメトニミーの関係に立つこと、さらに人との関連で発達心理学の知見を参照して言うならば、「こと」は「もの」に先行すること、そして「こと」が時間の観念を含む<推移的>な存在と認識されるのに対し、「もの」は超時間的で<恒常的>な存在として認識されるという対立が提示される。さらに、第四章では、日本語の「もの」が<こと（言/事）ば>を通して差異化され、秩序づけられた意味の体系に組み込まれることのないまま、何か<生動性>を帯びた<他者性>を有する存在として認識され、「もののけ」、「もの狂い」のような表現を生んだこと、また、自立した個体として表象される傾向がそれ程顕著でなく、その結果、「間（ま）」とか「縁」（ひいては「雰囲気）」といった境界域的な部分に特別な意味づけが与えられる認識が生まれるようになったと考えられること、一方「こと」への志向性と連動する形で事態を「なる」という様相で捉える好みも生じたと思えること、などが指摘される。

最後に第五章では、本論文を通しての論考から得られた結果がまとめられ、今後の展望として、狭義の<言語>の域を越えて<文化>や<思考>の領域への展開の可能性が示唆されている。